

水稻の初期管理(令和8年産版)

1 床土の準備

○床土

【購入培土の利用】

- ・健苗育苗のため、**購入培土を使用**する。
- ・購入培土は、製造者によって製造過程や肥料配合が異なるため、確認の上、施肥や育苗期間のかん水に注意する。
- ・種子を温湯消毒する場合、病害の発生要因の少ない粒状育苗用培土を使用する。苗中に外部からカビ・細菌等の侵入による病気の蔓延を予防するため薬剤を施用する。

【山土等の利用】

- ・**pH5.0～5.5の土を用意する**。pHが高いと苗立枯病等が発生しやすくなり、低すぎると根に障害が出る。
- ・pHが高い場合は、調整剤「ペーハー(pHを0.5下げる調整剤)」等を混合し補正する。

土の種類	赤土	黒ボク土	沖積土	※ただし、箱あたりの混和量は100gを越えないこと
「ペーハー」の混和量(g/箱)	60	70	50	

※粘土質の強い土は避ける。

○育苗箱

- ・前年に育苗中に立ち枯れ症状などの病害が発生した育苗箱は、ケミクロンGやイチバン等で消毒した後、使用すること。(病原菌が残っていることがあるため。)

○床土の施肥と消毒(例)

・播種時灌注の場合

水100ℓあたり:(肥料)新健太郎(8-20-15) 2kg
(農薬)好ガレースM液剤100mℓ+ダエール1000 100mℓの混用
又はナリアインフロアブル50mℓ

・播種前混和の場合

育苗箱1箱当たり:(肥料)稚苗用555(5-5-5) 30g
(農薬)好ガレースM粉剤6～8g+ダエール粉剤20g
又はナリアイン粉剤6～8g

2 種子の準備

○種子消毒

- ・消毒済種子は、そのまま浸種を行う。未消毒種子は、テクリード C フロアブルによる消毒や、温湯消毒(60℃、10～15分)を行う。
- ・温湯消毒は、イネシンガレセンチュウ、いもち病、ばか苗病、苗立枯細菌病、もみ枯細菌病に効果がある。

○浸種

- ・水稻の種子は、出穂後15日以降(登熟中期～後期)が高温になると休眠が深くなり、発芽がバラついたり、発芽が遅くなるなどの影響が出ることがある。(令和7年(昨年)の夏

も猛暑だった。)

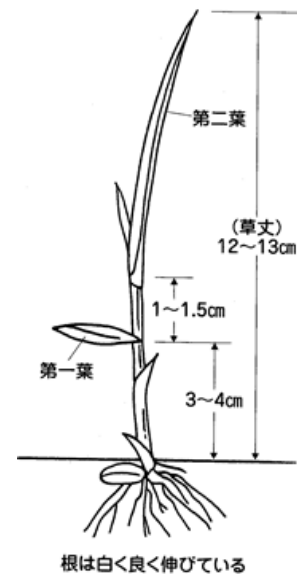
【対策】

- ・浸種は十分に「じっくり」行う。
- ・浸種の水温は13℃で行う。特に浸種始めの水温は13℃を確保する。
(あまり、高い温度で短時間に浸種を行うのも避ける。)
- ・夜間の水温が10℃を下回らないよう保温に努める。
- ・種子4kgに対し16ℓで浸種。
- ・積算温度100~120℃(13℃で8~10日間が目安)
- ・購入した消毒済種子の場合、積算温度120~130℃を目安とする。
- ・雑菌が繁殖しないよう、まめに(2日毎)水を取り替える。

【良い苗の姿】

○催芽

- ・催芽器利用:均一な催芽に留意する。(28~30℃)
※温度が高いと褐条病が発生しやすくなる。
- ・催芽の目安:はと胸状態(1mm程度に芽が切れた状態)。
催芽後に全体を確認してから播種する。
- ・催芽後の陰干しで凍らせないように気をつける。



3 播種

- ・「播種量はうすく」が良質苗の基本。

○播種量

- ・催芽粉で150~170g(乾粉で約120~130g)／箱
- ・乾粉4kgで30箱に播種する。

○出芽

- ・育苗器の使用は雑菌が繁殖しやすいのでなるべく避ける。※基準は30℃で2昼夜
- ・平置出芽の場合は、ハウス内の気温が35℃以上にならないよう換気を行う。

4 育苗管理

	出芽期~4日	第1葉展開以降
日中温度	25~20℃	日中はできるだけ低く。(22~18℃) ※最高を25℃以上にしない。
夜間温度	15~10℃	夜間はできるだけ高く。(10~5℃)
かん水	・ハウス内に出して1~2日はかん水をしない。 ・3日目以降は晴天の日のみ1日1回、早朝(または午前中)かん水をする。 ※1回あたりのかん水の目安は、夕方に箱の回りが白く乾く程度 ・雨天、曇天の日のかん水をしない。	
換気	・天気の良い日は早朝より換気を行い、夕方は太陽が落ちる前に閉じる。 ・曇雨天の日でも、ハウス内に霧がたちこめるようなときは、換気をする。	

5 施肥設計(例)

○夏季の熱中症予防のため、全量基肥肥料を使いましょう。

品種名	肥料名	施用量 (kg/10a)	散布日
コシヒカリ	① ひとふりくんプレミア1号 N:P:K=6:16:16、Mg:2、けい酸:10	80 (N:4.8)	移植前20日 以内
	② ひとふりくん1号 N:P:K=12:20:22	40 (N:4.8)	移植前20日 以内
	③ ひとふりくん側条085 N:P:K=20:18:15	20~25 (N:4~5)	移植当日
とちぎの星	① とちぎの星専用プレミア N:P:K=12:12:12、Mg:1、けい酸:16	45~60 (N:5.4 ~ 7.2)	移植前20日 以内
	② とちぎの星専用ひとふりくん N:P:K=12:12:12、Mg:3	45~60 (N:5.4 ~ 7.2)	移植前20日 以内
	③ 側条とちぎの星専用ひとふりくん N:P:K=24:12:12	25~30 (N:6 ~ 7.2)	移植当日

(JAかみつが令和8年用春肥料・農薬カタログ集、資材申込書から)

6 移植

・栽植密度は、**一坪当たり60~70株(1㎡あたり18~22株)を基本**とする。生育及び収量のバラツキが軽減できる。

・**植付本数は3~5本**。薄植えとし、分けつにより株を作る。

・**植付けの深さは2~3cmの浅植え**。深く植えると分けつを抑えてしまう。

・取置き苗は長期間ほ場に置かない(いもち病の感染源となる)。

・**移植後は水深5cm程度**に保ち、水温を上げて活着を促進する(強風が予想されるときは、植え付け姿勢を維持するために水深を深くする)。

7 病虫害防除

・箱施用剤を用いることで、**葉いもちや紋枯病、イネミズゾウムシやイネドロオイムシなどの初期害虫の発生を抑えることができる。**

・適用病虫害及び使用方法は、薬剤の登録情報やラベルを確認する。

・薬剤は使用方法を遵守する。

8 雑草防除

○雑草防除における基本技術

・初期剤を移植前に散布する場合は、7日前までに散布する。

・除草剤は使用方法、環境により効果が大幅にふれることがある。効果を高めるために以下のことを心がける。

(1) **代かきを均平**に行う

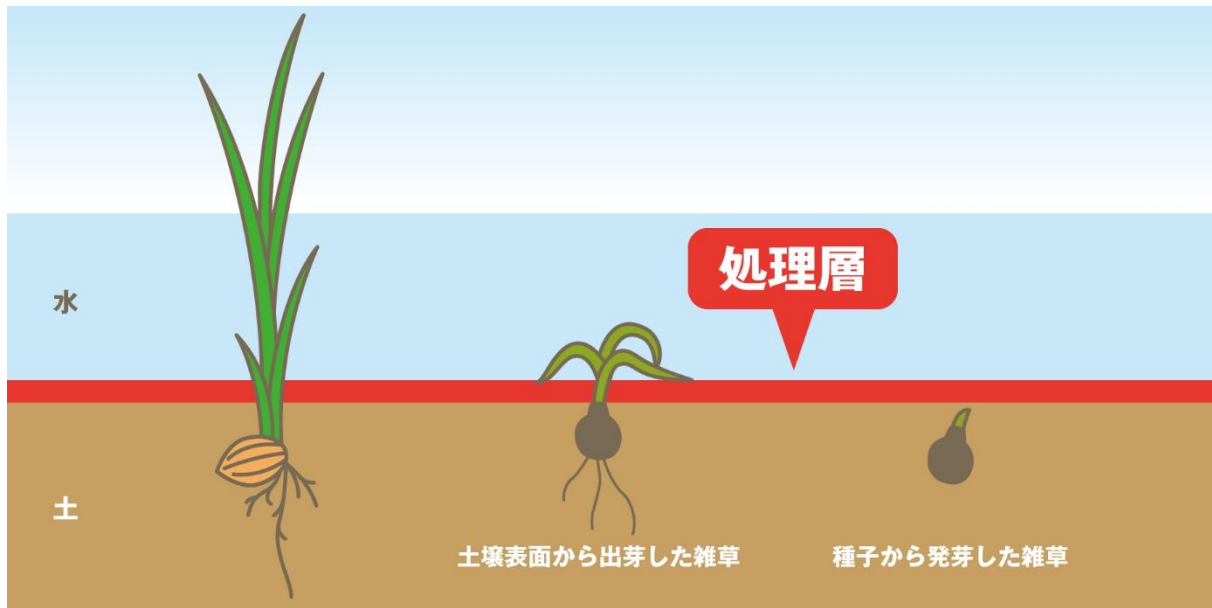
除草剤の効果を高める上で水深は重要な要素である。特にフロアブル剤、ジャンボ

剤は、5cm以上の水深があると薬剤が均一に広がり効果が安定する。その他の剤も田面に凹凸があると効果が劣る。できるだけ田面の均平を心がける。

(2) **水管理を適正に**行う

除草剤散布後7日間は水尻を止めて完全止水とし、落水、かけ流しをしないこと。落水、かけ流しは除草剤の処理層が安定せず、効果を低下させる。

初期剤・初中期一発剤の除草メカニズム(クミアイ化学 HP から引用)



剤型による薬剤成分の動き(クミアイ化学 HP から引用)

